日本文学全集45　武田麟太郎 島木健作集

昭和四十四年四月七日　印刷
昭和四十四年四月十二日　発行

著者　武田麟太郎　島木健作
発行者　陶山巌
印刷者　高橋武夫
発行所　株式会社　集英社
〒101 東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三
電話 東京(265)六二一　振替 東京 一五六五三

印刷　大日本印刷株式会社
製本　大日本印刷株式会社
製函　文京紙器株式会社
本文用紙　十條製紙株式会社
クロス　東洋クロス株式会社

検印廃止
落丁・乱丁本はお取りかえします

Printed in Japan

日本文学全集

武田麟太郎 島木健作 集

編集委員（五十音順）

伊藤　整
井上　靖
中野好夫
丹羽文雄
平野　謙

装　幀　伊藤憲治

挿　絵　風間　完

目次

武田麟太郎集

日本三文オペラ　七
市井事　二五
銀座八丁　四三
一の酉　一三
大凶の籤　一三七
分別　一五三
弥生さん　一六三

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

島木健作集

癩　一八三
生活の探求　二二〇
赤蛙　三八七
注解　三九四
作家と作品　田宮虎彦　三九九
年表　四二〇

武田麟太郎集

日本三文オペラ

白い雲。ぽっかり広告軽気球が二つ三つ空中に浮いている。――東京の高層な石造建築の角度のうちに見られて、これらが陽の工合でキラキラと銀鼠色に光っているありさまは、近代的な都市風景だと人は言っている。よろしい。我々はその「*天勝大奇術」または「何々カフェー何日開店」とならべられた四角い赤や青の広告文字をたどって下りて行こう。歩いている人々には見えないが、その下には一本の綱が垂れさがっていて、風に大様に揺れている。これが我々を導いてくれるだろう。すると、我々は思いがけない――もちろん、広告軽気球がどこから昇っているかなぞと考えてみたりする暇は誰にもないが――それでも、ハイカラな球とは似つかない、汚い雨ざらしの物干台に到着する。

浅草公園の裏口、田原町の交番の前を西へ折れて少しばかり行くと、廃寺になったまま、空地として取残された場所がある。数多くの墓石は倒れて土に埋まっていい、その間に青い雑草がのぞいているのが、古い卒塔婆を利用して作った垣の隙間から見られる。さらに眼を転じると、この荒れた墓地に向ってひどく傾斜した三階建の家屋に気がつくだろう。――軽気球の繋がれているのは、この三階の物干台で、朝と夕方には、縞銘仙の筒*っぽの着物を着たここの主人が蒼白い顔を現して操作を行う。すなわち、彼は、萎んだ軽気球が水素ガスを吹きこまれると満足げに脹れあがって、大きな影を落しながら、ゆるゆると昇って行くのを眺めたり、太綱を巻いて引くと屋根いっぱいにひっかかりそうになって下りてくるのを、たぐり寄せたりするのである。

いうまでもなく、これがこの四十すぎの男の本職ではない。東京空中宣伝会社から、こちらの地域の代理人としていくばくかの手当は受取り、それも彼の重要な収入になっているのだろうが、表向の商売は別にあるし、その他多くの副業も営んでいるのである。――

墓地から我々の見た彼の三階建の家は裏側に当っているので、表の方へ廻って彼の店を見るならば、彼が日に二合ずつの牛乳を呑むにかかわらず、乾燥した皮膚をして、兎のように赤い眼の玉をキョロキョロさせ、身体じゅうから垢の臭を発散させている理由も、何だか了解で

きるような気がするだろう。それほど、彼の店は陰気で埃っぽく不衛生である。動いたことのない古物が——鍋釜、麦稈帽子、靴、琴、鏡、ボンボン時計、火鉢、玩具、ソロバン、弓、油絵、雑誌その他が古ぼけて、黄色く脂じみて、黴に腐っている。ただ、これらの雑然とした道具と道具との狭い間を生き生きと動いているのは、主人の子供たちだけである。——細君はやはり赤茶けた栄養の悪い髪の毛を束ね、雀斑だらけの疲労した表情をしているが、恐しく多産で年子に困っている。かつて、あるテキヤに口説かれたことがあったが、そして、もう少しのところで誘惑されてしまうところであったが、彼女は思いとどまって次のように言訳をしたほどである。

——自分は関係するとテキメンに子供を産む性質だから、後になってこのことが露顕するかもしれない、その時には足腰の立たぬくらいぶん撲られて追いだされ、食べ物にも困り、しかし、あなたは浮気な色事師だから世話なんぞ見てはくれまい、そんな結果を思うとどうしてもできない、と断ったのであった。

——主人は他に周旋業、日歩貸等もやっている。この後者のために、新聞の朝刊三行案内欄に「手軽金融 あづま商会」の広告を出しているが、これは貸出の回収不能なんかで手間取るよりもと、簡単に「調査料」詐取の方法を採っている。すなわち申込者から、普通一円、市外二円の割で、信用担保等の調査料を取りたてるのであって、その調査の結果は、御融通できないということになるのである。それは貸さない口実を見つけだすための調査料のような観を呈している。——たとえば、担保の有無、保証人の信用工合、細君が入籍してあるか、子供があるかなぞの中にその口実はいくらでもころがっていたし、条件が揃っていても、現住所にどれほどいますかとの問いに、哀れな申込者が六カ月と答えれば、商会では一年以上同一場所に居住している人でないと貸しださないと言い、よしんば一年以上であっても、いや二カ年以下の御家庭は困るのですと——何とでも理由はつけて、調査料を捲きあげえられるのである。

以上の二つの副業が、この主人の全体としては陰鬱な表情のうちで、眼だけを生き生きとしたものにしている。赤い瞳であるが、これを上眼使いにしょっちゅう動かす時に、白眼がチラチラと冷く光るのである。調査に出かける場合にはどんな遠いところでも自転車に乗って行き、脂じみた朴歯の下駄で鈍重に動作し、ぽつりぽつりともの言って口数も少い。ところが、家に帰ってくると、じつにキビキビとして、一階から三階の間を馳け廻り、部屋部屋の様子をうかがって、逢う人ごとに如才な

く弁舌を振うのである。——これは、彼のもう一つの副業がしからしめているのであって、すでに想像できるように、彼の三階建の家屋はアパートとして経営されているのである。

三階は、細君がお神楽三階は縁起が悪いと反対したのを押しきって、あとから建て増されたものだ。このことは主人の金の貯ってきたのを語るとともに、我々が墓地側から望む時、この家が傾いているように見え、また、土の焜炉や瀬戸引の洗面器、時には枯れた鉢植の置かれてある部屋部屋の窓が規則正しく配列されてなくて、大小三つある物干台といっしょに雑然と乱暴に積み重ねたような印象を与えられる原因をなしている。

アパートといっても——いや、そんな何となく小綺麗で、設備のよくととのった西洋くさい貸部屋を意味する言葉を使ってはいけないだろう。なぜかといえば、卒塔婆の破れ垣の横を通ってその入口に達すると「あづまアパート」と書いた木札がかかっていて、ちゃんと、アパートではないとことわっている。

そこで、このアパートが普通の下宿屋ないし木賃宿とそんなにちがったものでないといっても、あやしむことなく理解されるだろう。それでも、下の入口の下駄箱の側にはスリッパが——アパートの主人はこれをスレッパと呼んでいる——乱雑にぬぎすてられてあるし、廊下の両側の部屋には、褐色のワニス塗りのドアがついていて、中からも外からも鍵がかけられるようになっていて、幾分西洋くさいアパートに近づこうとはしている。けれどもいったん部屋にはいると、部屋の境目がどういうわけか、襖やガラス障子でくぎられているので——もちろん、これらは釘で打ちつけられてあけ閉てできぬようにはしてあるが、お互いの生活は半ば丸出しといってよいのである。畳も壁も、それから乾からびてしょっちゅう割れる音のしている柱も、人間のいろんな液汁が染みこんでいて汚く悪臭を発散している。表通に自動車が警笛をならして走るたびに部屋の振動するのはいうまでもなく、べとべとしていて足裏に埃のいやにくっつく廊下や階段を誰かが歩いただけで、部屋全体が響けるのである。

油虫の多い炊事場は、二階階段の上り端に、便所と隣りあってあるが、流しもとは狭くて水道栓は一つ、ガス焜炉は二つしかないので、支度時には混雑して、立って空くのを待っていなければならない。

こんな不潔で不便でも、貸賃が安く、交通に都合がよいので、たいていの部屋はふさがっているようだ。六畳が十円で、ガス、水道、電灯料が一円五十銭——合計十

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton

一円五十銭の前家賃になっている。多くは浅草公園に職を持っているのであるが、彼らの借室人としての性質はどんなものであるか。

彼らはその家賃が部屋の設備からして高いと考えている。できれば値下すべきであり、ことに最近の不景気で以前と同じ金を取るのはひどいと考える。そして、そのことは一人一人で交渉するよりも、全体としてアパートの主人に談合すべきであると考える。——ある夜、多くの者たちは十二時すぎまで仕事があるので、一時ごろから三時前までもかかって、協議して一円の値下を要求することに決めた。そして翌日は晦日になっているのだが、誰も払わずに、交渉を引受けた小肥りの映画説明者*の返答を待つことになった。ところが、翌朝早く、主人は部屋部屋を起して廻って部屋代を取りたてた。誰か昨夜のことを彼に告げたものがあったのだろうが、皆も申合せを忘れたように、主人の剣幕に恐れをなして払うのであった。そのくせ、お互いにはそんなことをしたとは顔色にも出さず、知らぬ顔でいた。——朝寝坊の説明者は次から次へとひっきりなしに電話に呼びだされるので出てみると、決定を裏切ったものたちが、じつは昨夜あの仲間にはいると言ったが、あの時はすでに家賃は払ってあったんで、といった風な見え透いた言訳を出先きからするのであった。そこで説明者も独りでは力もないし、主人に憎まれてもしかたがないと、彼もまた、定額を支払ったのである。

——そんな彼らであるので、共同生活の訓練は少しもない。掃除番が順次に廻ってくるのであるが、炊事場でも、それから夏を除いては隔日に立てられる風呂でも、できるだけ汚くしようとしているようにさえ見える。野菜の切れはしや、魚の骨や塵芥はそこいらにちらばっているし、風呂なんかは二三人はいると、白い垢や石鹸の糟が皮膚にくっつくほど浮いて小便臭くなってしまう。他の部屋に要事があって入る時も、ノックなしにドアを突然あけるし、鍵のこわれている便所なぞも平気で扉を押し開いて、先に入ってうずくまっているものを狼狽させたりする。

そのうちでも、最もうるさいのは、暇のある女たちだろう。その中心には、吉原遊廓の牛太郎の女房が二人いて、彼女たちは昼は亭主がいるので部屋に閉じこもっているが、夜はお互いの部屋を菓子鉢を提げて行き来し、女たちを集めて晩くまで噂ばなしに時をすごすのである。部屋の前には女のスリッパや草履が重なりあって、彼女たちの高い笑い声はどこの部屋にあっても聞くことができる。

最近の彼女たちの話題は、六十すぎの爺さんと婆さんとの恋愛はどんな風に行われうるかということであるらしい。――その婆さんはずっと以前から、三階の一号室に住んでいるが、そこへ近ごろ同年配の老人が亭主として入ってきたのである。彼はよほど遠慮深い性質で、婆さんのところへ婿入りしたということが強く頭にあるとみえて、いつも帰ってくる時には「今日は」とか「今晩は」とか言ってから部屋にはいる。すると婆さんはやさしい声で、

「何ですか、自分の家へもどってくるのに、今晩は、と言う人がどこの世界にありますか。ただ今、とか、今帰ったよとかおっしゃい」と叱っているのが、部屋の外まで洩れてくる。それに対して爺さんは、

「うん」と幸福そうに答えて、女の子のために土産に買ってきた食べ物なり、遊び道具をそこへ置くのである。

――七つになってこの四月から小学校にあがっているその子供は、婆さんの妹の私生児で、養育を託されているのである。

それでも次の日はやっぱり爺さんは、

「今晩は」とそっと部屋に入ってき、婆さんは同じ苦情を繰りかえす。ずいぶん永い間、この対話は二人の間に飽かず続けられているのが、女たちの噂ばなしで笑いの種になっているが、何もおかしがることはないのである。

彼らは義太夫の寄席で知合になった。婆さんはそこで仲売の女として働いているので、爺さんは竹本駒若という義太夫語りが好きで毎晩聴きに出かけているうち、お互いに馴染みあってしまった。

そこで、爺さんはそれまでいた息子の家を中学生のような昂奮と決心とで、少しばかりの小遣銭を持って、飛びだして婆さんのところへやってきたわけである。

息子の家にいるのが彼の苦痛であったのは、何も息子夫婦が彼を虐待したからでもなく、物質的に苦労させたからでもない。それどころか、彼らは老人をいたわり、豊富に着せ、食わせていた。なぜならば、息子は仲買人であって長距離のも含めて電話を三本も持っているような物持であったからだ。だけれど、爺さんには何か物足りないものがあった。嫁は亭主の父親としてつくしてくれるだけではないか。それにはむしろ利己的なものがある。息子は仕事にかまけて、金に追われている。老人が生活のうちに欲しいものは誰も考えてくれず、与えてもくれない。それは愛情であった。

その親身な愛情を彼は今、最近の知合の他人のうちに見つけだしている。彼はその中に浸り、気持の結ばれを

揉みほぐしている。

婆さんも彼を得たことを悦んでいる。そこで、つらいことではあろうが、爺さんがあんなにも好きな義太夫の寄席へも、ひょっとして息子の家から探しに来ないものでもないと、断然行くことを禁じてしまった。そして、日本物の活動写真か、布ぎれ一枚だけが舞台装置である安歌舞伎を見ることを彼にすすめるのであるが、爺さんも、そのことをもっともと思って、子供の遊び友だちになってやったり、それが寝てしまうと、公園をぶらりと歩いて日本酒を一本だけ飲んで帰るという風である。そして、横びんからつづいて銀色のヒゲのはえている顔を、首すじまでも真赤にして、今晩は、とおとなしく部屋に入ってくるのである。

女の子が学校へ行くようになってから、朝早く起きる必要があるので、彼は考えて眼ざまし時計を買ってきた。それは、指定の時刻が来ると、「煙*も見えず雲もなく」をうたいだす小型のものである。——それを、七時のところに眼ざましの針を廻していると、茶を入れてのんでいた婆さんは言うのであった。

その言葉は若い女が情夫に対して言うような意味合のもので、どんなことがあっても、自分たちから離れないでくれ、しかし、息子さんは探偵を使って私たちのところにあなたがいることを嗅ぎつけることができるかもしれぬ、それが私は心配だ、と言ったのである。

「家から迎えに来ても帰らない？　爺さん、本当に帰っちゃダメですよ」と、艶のある声で言ったのである。

すると、爺さんは、自分が今どんなに居心地よくいるかということを語って、けっして帰宅はしない、死水はこちらでとってもらう決心でいると言ってきかせた。そして、近ごろは新聞を見ても広告欄には全然眼を触れないように努めている。なぜかといえば、そこに「父居所を知らせ」とかその他の巧い文句で彼を探す広告が出ていたら、魔がさして、こちらを離れてしまわないものでもないからである、とつけ加えるのであった。

これらの対話は、聞耳を立てていたヒステリーの牛太郎の女房が、次の爺さんの述懐と婆さんの同情とともに、みんなに披露して、哄笑したのであるが、何もおかしがることはないのである。

婆さんは爺さんの今までの女との交渉なぞを質問したりした。爺さんは淡泊に答えて、三十の時に女房に死別れてからは、あまり接触がないと言って、婆さんを安心させた。その女房は「早発性何とかいう気違いになってね、狂い死しましたがね。医者はあまり気苦労がすぎたからだと言ってたが。——当時、わたしたちの貧乏はず

いぶんはげしかったので、貧乏があいつを殺したんでしょう、きっと」

この言葉が終るか終らぬうちに、爺さんは驚かされてしまった。隣りの部屋できいていた牛太郎の女房も驚いた、と言った。それは、突然、婆さんが泣きだしたからであった。婆さんは泣きながら言った。

「わかりますよ、わかりますよ」それから嗚咽で声を震わせて——「貧乏がすぎて気が狂って、それで若死して——お神さんの気持も、その時のあなたの気持も、わたしにはよく分りますよ」

それから二人とも黙ってしまった。爺さんは階下にわざわざ下りて行くのが大変なので、蒲団の裾の方に尿瓶が置いてあるが、そこで小便をした。それから、褐色の斑点のできている太い腕を拱いて横になったが、——そのまま、永い間眠れなかった。

爺さんは眼ざといので、いつも六時前にはさめるのであった。だから、本当をいえば、眼ざまし時計なぞは要らないのである。しかし、彼は窓ぎわから射してくる白白とした朝の光のうちに、枕もとの時計の針が廻って七時になるのを待っていた。もう追つけうたいだすぞ、と考えていると、チクタクの音を消して、突然、時計は陽気に「煙も見えず、雲もなく」と音楽を奏しはじめた。

爺さんは安心したような表情で、横に枕を外して寝ている女の子を揺り動かした。

「さア、チイ坊や、時計がうたってるから起きるんだよ、チイ坊、お起きよ、学校だよ」と、朝で痰がのどにたまっているので、皺嗄れた声を出して、彼は言った。

ちょうど、この時刻に隣り部屋の女房は寝つく習慣なのであるが、毎朝、眼ざまし時計に眠りを妨げられることになってしまった。もちろん、今までにだって、彼女の昼寝をかき乱すものがあったのである。それは四号室の蓄音器である。

そこにはカフェーの女給が情夫といっしょに住んでいるのだが、男はしょっちゅう家をあけてよそに寝泊りしている。それは他に女をこしらえるからである。

女は店に出る前にきっと数枚のレコードをかけてきく。よほどの音楽好きとみえるが、それもゆっくり聴き楽しむという風には見えない。一枚を半分ばかりでよすと、次には騒々しいのをかけてみ、それも途中でよして、他のとかえるといったありさまである。彼女はいらいらするので音楽を聴き、そのためにいっそういらいらしだすようである。だから、暇のある女房たちが——ほら、ヒスがはじまったよ、と言うのも当っていないこともない。

男は呉服物のせり売りの桜*をやっている。色事師で――ニキビが少し眼立つが、色白のいい男である。アパートの主人の細君に言い寄ったのはこの男だ。あの場合は、奇妙な理由から失敗したが、そんなことは今までにほとんどなかったといってよい。しかし、どうして女というものはこんなに脆いかということを知ることは人生の上で大きな損をしたことだと彼は考えている。そして、このことは彼を憂鬱にするが、惰勢として女漁りに耽るよりしかたがない。だから、彼の場合は、女に選び好みの感情は失われている。どの女もいちようにみえるとすれば、勢いそうなるではないか。――この人生の損は、ますます彼にあって、拡がって行くものとみられる。なぜならば、女は定評のある色魔に対しては、一種の親愛な情を持つし、好んで接近してくるからである。それは、主として快楽がいっさい無責任だとあらかじめ分っていることと、女同士の競争意識が掻き立てられるにかかわらず容易にその男が獲得できるという安心からであろう。――

このことは、アパートの暇のある女房たちの間にも起っている。彼女たちは彼に誘惑されることを待ち、しかし、口では、アパート一番のいい男であるが、誰でもかまわず関係するなんて嫌なこった、それが玉に瑕だなぞと言っている。

そして、四号室の女給を嫉妬するわけだが、それは全然意識しないで、彼女の悪口を盛んに言うのである。女給の女房れんに評判の悪い原因は主としてこの点にある。

――こうした人生の損をしている彼はもう一つ悲劇を背負っている。それは、彼が女給である情婦を心から愛してしまったことである。女を全体として信用できない男が、一人の女を愛するとは！

彼は他の女との交渉中に、烈しく情婦の女給に対して嫉妬を感じることがある。この脆い女と同性である情婦もまた、このような姿態を他の男に示すのではないか、という考えが突然彼を苦しめるのである。自分の好色漢的な行為がかえって、嫉妬をひき起す動因になるなぞは救われないことだ。

さらにこの悲劇がたんなる悲劇として終っているのであるが、それはこの顚倒した嫉妬に当るだけの行為が、情婦に少しもないことである。彼が接した数千の女性のうちで最ももの堅いのが自分の情婦であったことは、彼を救わないばかりか、ますます疑い心の迷路に彼をひきずりこんでいる。

かつて、暴力団狩のあった時、彼の仲間も挙げられた

のであるが、彼はその男の情婦で四号室の女と同じカフェーに働いているのに電話をかけて呼びよせた。女は少しく自棄気味なところもあって、泥酔して彼の誘惑に辷りこんできた。彼は深夜、この女を見るのに堪えられなくなって、あづまアパートに帰ってきた。彼は情婦が外泊しているか何かの裏切行為があるかと、恐れながら、じつは期待していたが、女は四号室に平穏に眠っており、彼を見ると寝場所を作ってくれるのであった。——彼は張りつめてきた気持が折れると、自分に腹が立ってきて、きゅうに女に対して怒りだした。そして、手前は、俺がサツへあげられたりなんぞしたら、安心して浮気しやがるだろう、と罵り言葉を繰りかえして撲るのであった。撲りながら、自分が情なくなったのも事実であるが、このような彼の倒錯した気持は、この後もずっと続いている。

最近のこと、彼はバクチ場で負けたので、情婦を抵当として、彼女に気を寄せている某に金を借りたことがある。その時は、すぐ回収しえたので何の変化も二人の関係に起らなかったわけだが、彼は徹夜のバクチから帰ると、また例の癖が出て、手前は某に好意を持ってるんだろう、そうにちがいない、そうでなければ、やつがあんなに手前を抵当に金を貸すはずがないんだと難じはじめ、ついには流血の騒ぎを起しかねない始末であった。

そして、これらの憂鬱を流しこむところは彼には結局女色よりほかになく、彼の放埒な日々の行為はやはり続けられているのである。四月になってから、金沢の博覧会にテキヤの一行と稼ぎに行っているが、毎日のように情婦のところへ手紙を送ってくる。それは半ば脅迫じみた文句に充たされていて、その地方で浪費されているにちがいない彼の愛慾の顚倒した姿を映しだしている。——

そして、このことを十分に知っている四号室の情婦は、焦躁に駆られた表情で、店に出る支度をすると、あれやこれやのレコードを手あたりしだいにかけている。彼女の音楽好きはますます嵩じてきた様子であるが、いうまでもなく、彼女自身はその理由をつきとめてはいないのである。

この呉服物せり売りの桜である色男に反して、一人の女のために——それも生れてはじめて知った女のために背負投を食わされ、すっかり鬱ぎこんで、女嫌いになってしまったコックが二階の便所の横、七号室にいる。

見るから気の弱そうな顔つきで、眼は近眼鏡のために神経質に瞬いている。彼の部屋から外出するためには炊事場の前を通らねばならないが、そこに女房れんが塊っ

试读结束：需要全本请在线购买： www.erton